参考資料１

第３回　双葉町復興まちづくり委員会　議事概要

■日　時　：　平成２４年１０月１６日（火）　午後１時３０分～午後４時３０分
■場　所　：　双葉町役場埼玉支所　４階　家庭科室
■出席者　：　別紙座席表のとおり
■議事概要
１．開会
２．議事
（１）「7000 人の復興会議」中間整理について
資料 2 に基づき、事務局より説明後、質疑。委員の主な意見は、以下のとおり。
○ 各地でやってきて、これが双葉町 7000 人の意見だということになるのか。あまりにも参加者の数が少ない。単にチラシだけで会議を周知するのではなく、各会場に参加してくださいという積極的な周知をし、より多くの町民の声が聞けるようにお願いしたい。

（２）木村委員の講演
「チェルノブイリに学ぶ福島・双葉町の現状」
資料 3 に基づき、木村真三委員による講演と質疑。
講演概要は別記のとおり

（３）今後の審議の進め方について
資料 4 に基づき、岡村副委員長より、今後の審議の進め方について委員長・副委員長試案を説明。委員の主な意見は以下のとおり。
○ 木村委員の講演を踏まえると、もう双葉町には帰れないということを基本に考えてはどうだろうか。
○ 審議の進め方として、中期、長期ということだけではなく、何年とか、何年後とかの数字を入れ、ある程度の工程表を作った方がいいのではないか。
○ 「復興まちづくり計画」の対象は、すべての双葉町民を対象とするべきである。当面の生活拠点では、仮の町というものは必要だと思う。暮らしが長期化することも考えて、役所、学校、住宅、老人ホームといったものを１ヶ所に作るべきだ。離れている人とコミュニティをどうやって繋ぐか、歴史、文化をどうように継承していくか、大変難しい話である。
○ 双葉町の復興は長期的になると考えられるので、後の世代に受け継いでいかないとできないと思う。こういった議事は双葉町の人が集まらないとで

きないと思う。お互い双葉町の人同士で繋げていかないと復旧、復興についても繋がっていかないのではないかと思う。これを完全に分けてというのではなく関連づけて考えていかないといけない。

○ 部会で議論をするということだが、生活再建部会では仮の町に繋がっていくかと思うので、仮の町ができたときに自分が行きたいと思っている委員で話し合わないと無責任な会議になる。また、ふるさと再建部会では中間貯蔵に対して反対という意思を持った委員で集まらないと意味を持たないと思う。

○ 生活再建の流れで、仮の町に行く、行かない、今どこに住んでいようと、今後ここに住もうと自由だと思う。しかし、居住する自治体の行政サービスを受けるのならば何らかの負担は必要となるし、いつまでも恩恵のみを預かるのはいけないと思うので、この委員会で議論して何らかの答えを導き出さないといけないと思う。

○ 部会を立ち上げるということはいいことだと思う。しかし、7000 人の復興会議が全部終わってない。延べ 143 名、1,168 件の意見だけでは責任を持てない。会議が全部終わってから部会を立ち上げても遅くないのではないか。

○ 部会でいろいろな意見を言う機会もあってもいいと思う。この委員会は来年の 3 月までと期限が決まっており、あと半年しかないので、もっと真剣に議論していくべきではないか。

○ 7000 人の復興会議の参加人数が少ない。ノートを配ったからそれでいいではなくて、改めて各地で開催する必要があるのではないか。

○ 7000 人の復興会議以外にも、行政区の総会や老人会等の町民同士の集まりからも意見を吸い上げて、それを委員会に出していくこともいいのではないか。

○ アンケートについて、具体的な実施時期と対象をどう考えているのか。できれば小学生でも分かるような設問を 1 問か 2 問くらい入れてもらいたい。あと、日々皆さん状況変わっているので、定期的に、季節の変わり目に 1 回くらいはアンケートを取ってほしい。

○ 避難生活が長くなり、トラブルばかりが起き、双葉町の和が崩れコミュニティがほとんどなくなっている。情報が町からは出ていないので噂が先行している。なんとか早くまとめてもらいたい。

○ 短期、中期というのはもう少し具体的な数字を入れた上で決定した方がいいのではないか。

○ 部会と復興会議との関係で、7000 人全員の意見を聞いてからという意見もあったが、この委員会は国や県や町の方針をどこまで聞いて、それとアンケートや町民の意見との関係を束ねていき、それに基づいて方針を作っていくものなので、時間に迫られている課題もあり、並行してやるべきと考える。

○ アンケート調査のどこかに子供用の設問を 1 ヶ所入れるのではなくて、本格的に子供を対象としたアンケートが必要。

○ 双葉町の今の状況、原発地域の今の状況を受けて、みんなの意見を聞くのと同時に、この委員会の中でできる限り国にもっと強烈にアピールしていく必要があるのではないか。これだけ過酷な避難生活をしているわけだから、それに対してきちんと生命や生活を維持、補償させることも含めて、この委員会の中で議論していく必要があると思う。今の避難生活をどのようにして少しでも今の過酷な状況を緩和するかということもこの委員会の重要な任務と思う。

○ それぞれ町民が、どのような繋がりを維持できているのか一番大事だろうと思う。また今まで避難生活を通じて避難先で生まれた小さい繋がりなどを積み重ねていくのが大事だ。

○ 受け入れ体制、避難時の自治体の在り方は、双葉町だけの問題ではなく日本のコミュニティの仕方をどうするのかという大問題なので、相互理解ができる仕組みを作れたらよい。

意見交換終了後、委員長・副委員長試案について了承され、以下のとおり決定した。

○ 今後は試案で示したテーマに基づき、集中した議論を行う。

○ 特定テーマを集中的に議論するために 3 つの部会、「生活再建部会」、「ふるさと再建部会」、「きずな部会」を設置する。

○ 町民の意向を把握するため、関係機関とともにアンケート調査を行い、委員会審議に活用する。

（別記）　木村真三委員講演「チェルノブイリに学ぶ福島・双葉の現状」の概要

※この講演内容は事務局の責任編集で要約したものである。（詳細は後日公表の議事録を参照）

○まず、チェルノブイリと福島の事故の違いを理解する必要がある。チェルノブイリ原子力発電所の事故では原子炉が崩壊するほどの大爆発をし、人体に有害なプルトニウムやウラン等が大量に飛散された。一方で、福島第一原子力発電所の事故では原子炉燃料はメルトダウンしたものの、圧力容器自体は破損しなかったため、核燃料物質がチェルノブイリのように地表に大量

飛散することはなかった（ただし、海洋への影響は未知数）。

○我々の人体に影響を及ぼす要因として心配なのが、セシウムである。セシウムには、半減期が２年のセシウム１３４と半減期が３０年のセシウム１３７がある。チェルノブイリは、半減期が３０年のセシウム１３７がセシウム１３４の２倍となっており、その影響が長く続くことになる。一方、福島第一原子力発電所の場合は、セシウム１３７とセシウム１３４の比は１：１にとどまっている。また、飛散したセシウムの量全体ではチェルノブイリの１／７から１／１０程度と言われている。しかしながら、人体への影響という意味では無視できない。

○チェルノブイリでは、ストロンチウム９０とプルトニウム２３９が大量に放出されているが、福島第一原子力発電所については、これらの陸地への放出量はわずかである。この拡散レベルでストロンチウム９０とプルトニウム２３９の人体への影響については、はっきり掴み切れていないのが現状である。

○除染を行うには、放射線は飛んでくるものであるから面的除染が必要である。セシウム１３７・１３４は遮るものがなければ１㎞先から飛んできていることが確認できている。このことは、半径１㎞を除染しなければ放射線量は元通りにはならないことを意味している。二本松市の調査結果から、いくら小学校や中学校のグランドを除染して線量が下がっても放射線はその外から飛んでくることや屋外での活動時間の延長などで外部被ばくの影響はほとんど変わらない。

○山々を汚染した放射性物質（セシウム）は、泥に吸着して、下流に流れてくる。そのため、川の下流域や山麓などでは、去年よりも放射線量が高くなる傾向が見られる。また、池などは一見放射線が低いように見えるが、それは水が遮蔽しているためであって、実際には蓄積した放射性物質が池の底を覆っていると考えなければならない。

○内部被ばくについては、摂取する食料について気をつけることで避けることができる。福島県産でも現在流通しているものは検査がされているから安全といえるが、自家菜園のものなどは測定する必要がある。

○チェルノブイリや広島・長崎の例から、被ばくを受けると、それがわずかに放射線を浴びただけでも、がん及びがん以外の病気（例えば脳卒中、心疾患）のリスクは上がると考えるべきである。

○双葉町の空間線量のデータを見せてもらうと、浜野公民館で 0.3μSv/h、ところが山田公民館で 21μSv/h を超えている。このように線量のバラつきが非常に大きい。私見であるが、このように大きなバラつきがある中では住めないのではないか。参考データだが、除染も何もせずに空間線量が下がっていくのを見て、帰還できる空間線量 0.1μSv/h になるのは、飯舘村で 2090 年頃になると予測できる。双葉町のデータはこれから空間線量などを踏まえて改めて推計して今後の委員会でお示しすることにしたいが、除染をしない場合 0.1μSv まで下がるのに 150 年くらいはかかるのではないか。双葉町で採取したコケ類からも相当のセシウムが検出されている。こうした汚染レベルを分析しながら、安全性については検討していく必要がある。